

幼児教育における慣用語の研究
－「遊びこむ」「言葉がけ」を中心に－

Research on jarogns in eary childhood education and care
－Focusing on “Asobikommu” and “Kotobagake”－

久米裕紀子*

KUME, Yukiko*

要旨

幼児教育で日常的によく使われる言葉「遊びこむ」や「言葉がけ」は、幼稚園や保育園の現場で生きて働いている言葉である。これらの幼児教育から生まれた「遊びこむ」「言葉がけ」という言葉について、それらが生まれ用いられる経緯や背景を探り、これらが幼児教育の世界で、幼児とかかわる大人が幼児について用いる独特の「言葉」（「慣用語」）として、どう浸透し、広がってきたのかについて検討し、それを通して幼児教育の専門性について考える。

はじめに

幼児教育の現場で、日常的によく使われる言葉がある。「遊びこむ」や「言葉がけ」などである。単に「遊ぶ」のではなく、「遊びこむ」のであり、単に「話しかける」のではなく、「言葉がけ」をするのである。これらは、通常の言語使用からは逸脱した奇妙な言葉であり、幼児教育の世界で幼児とかかわる大人が幼児について用いる独特の「言葉」（「慣用語」）である。これらの「遊びこむ」「言葉がけ」という慣用語は、幼児教育のなかで生まれ育てられたものと考えられる。これらの言葉には、幼児の遊びや言語を捉える独特の見方が込められており、また、保育の質の向上を願う保育者たちの思いが込められているものと考えられる。さらにこれらの言葉を共有し使うことによって、保育者たちは、幼児教育の専門性を獲得し共有し磨いていくものとも考えられる。本研究では、これらの慣用語が幼児教育の専門用語として、広がり、深められ、生きて共有されている現況を明らかにしたい。まず、秋田喜代美の関連する発言を検討し、ついで「遊び」の語義について考えることから始めたい。

1. 「遊びこむ」は造語か？

秋田は、2006.5の『幼稚園じほう』¹において、「5年ほど前に」、子どもの遊んでいる心理状況の深さを示すために、「打ちこむ」という既存の語を用いて「遊びこむ」という造語を案出したと記している。そして、「遊びだす—遊ぶ—遊びこむ—遊びきる」という階梯で遊びの展開過程が表現できるとしている。

秋田によれば「遊びこむ」は、一つの遊びが広がり

や深まりをもって子どもの心のうちで展開していく様相を示した言葉である。子どもが「遊びこむ」と、そのことは子どもの心にくっきりと刻み込まれ、あとあとまで記憶される。この記憶とともに、明日の遊びへの期待も生まれる。子どもたちは、それ自体楽しいから遊ぶのであり、評価を気にしたり、結果にとらわれたりしているわけではない。自分たちで進んで創意工夫し、集中する。そこでは、その子のその子らしさが生かされる。これが遊びこむことだと、秋田は、記している。

しかし、「遊びこむ」という言葉は、秋田が『幼稚園じほう』でこのように記すよりずっと前から、保育者たちによって日常的に使われていたとの認識が筆者にはある。すなわち、幼児教育の現場で長く働いてきた経験により、「遊びこむ」という言葉にはまったく違和感がない。これが新しい表現や造語だという感覚は、まったくない。むしろ、秋田の言及のはるか前から幼稚園現場で生まれ頻繁に用いられている慣用語だと考えられる。

保育は、子どもの主体性を培うことをめざす。したがって、子どもたちは受け身に「遊ばせられる」のではなく、能動的主体的に「遊びこむ」のでなければならない。それこそが保育者の願いである。だからこそ、この願いを込めて「遊びこむ」という言葉が生み出され用いられてきたのではなかろうか。この判断は妥当なのか。本稿は、筆者の修士論文前半部理論編の要約である。これに続く後半部調査編では、保育者たちへのインタビューやアンケート調査を通して、「遊びこむ」という慣用語の使用状況を確認し、上述の筆者の判断の妥当性を検証したい。ここではまず、「遊び」そのものが、どのように把握

* 武庫川女子大学大学院文学研究科 (Graduate School of Letters, Mukogawa Women's University)

されてきたのかについて考えることから始めたい。

2. 「遊び」とは何か—その多様性と統一性—

よく知られているように、平安末期の歌謡集には、次の歌がある。

遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、
遊ぶ子供の声きけば、我が身さえこそ動かるれ
(編者：後白河法皇)

この「遊び」は、歌舞音曲の遊びであり、遊女との遊びであるのかもしれないが、一般には、「子供の遊び」であると解されている(五味, 2002²)とすれば、この歌は次のように理解されることになる。つまり、「遊ぶために生まれて来たのだろうか。戯れるために生まれて来たのだろうか。なにしろ遊んでいる子どもの声を聴くと、私の身体さえも揺り動かされてしまうのだから。」と。子どもは、時の経つのも忘れて夢中に遊ぶ。子どものこの遊びこむ姿を見守る大人は、「この懸命さを忘れずに、健やかに育ててほしい」と願い、ひるがえって自分たち自身も「このように懸命に生きたい」と願う。子どもの遊びは、大人の心をも揺さぶる強く引き付ける力をもつのである。

それでは、子どもは実際にはどのように遊んでいるのだろうか。子どもは、あらゆる場所とあらゆる時間のあらゆる活動を、「遊び」に変ずることができる。だから子どもの遊びは多種多様であり、絶え間なく変容し流動する。たとえば、ピーテル・ブリューゲルの絵「子どもの遊び」には、実に多くの遊びが描かれている。森(1989)³によればここには、250人の子どもと91種類の遊びがあるという。この極端な多種多様さにもかかわらず、「遊び」を統一的に捉えることはできるのだろうか。

ヨハン・ホイジンガは、人間を「ホモ・ルーデンス」(遊ぶ人、遊戯人)と呼ぶ。遊びこそが、他の動物と人間とを分かちものである、そもそも人間の文化からして「遊びの精神、遊びの中から」「遊び」として生まれ、展開してきた。ホイジンガは「遊び」を、次のように規定する(ホイジンガ, 1973⁴)。

「遊び」とは、くっきりと定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動である。「遊び」は、自発的に受け容れられた規則にしたがっており、その規則はいったん受け容れられた以上、絶対的な拘束力をもっている。遊びの目的は行為そのもののうちにある、緊張と喜びの感情を伴い、<これは日常生活とは別なものだ>という分離の意識に裏づけられている。このようなホイジンガの「遊び」の規定を、次の六つに定式化することができる。

- (1)自発的な行為もしくは活動である。
- (2)くっきりと定められた時間、空間の範囲内で行われる。
- (3)自発的に受け容れた規則にしたがう。その規則はいったん受け容れられれば絶対的拘束力をもつ。
- (4)緊張と喜びの感情を伴い、創意工夫の余地のある、活動である。
- (5)遊びの目的は行為そのもののうちにある。
- (6)「日常生活」とは「別なもの」という意識に裏づけられている。

ホイジンガとともによく引用されるのは、ロジェ・カイヨワである。カイヨワは、遊びを次の六点に定式化している(カイヨワ, 1990⁵)。

- (1)自由な活動。遊戯は強制されない。強制されれば、遊びはたちまち魅力的で愉快的な楽しみという性質を失ってしまう。
- (2)隔離された活動。あらかじめ決められた明確な空間と時間の範囲内に制限されている。
- (3)未確定な活動。展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはならない。そこには創意の工夫があり、自由でなくてはならない。
- (4)非生産的活動。
- (5)規則のある活動。約束ごとに従う活動。
- (6)虚構の活動。生活上どうしてもそれがなければならぬとは考えられていない。

カイヨワとホイジンガの定式化を比較してみると、この二つがかなり重なり合っていることがわかる。この類似性に留意して両者の遊びについての規定を、次の表1のようにまとめることができる。

表1. カイヨワとホイジンガの遊びの定義の比較

ロジェ・カイヨワ	ヨハン・ホイジンガ
自由な活動	自発的な行為もしくは活動である。
隔離された活動	はっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる。
未確定の活動	緊張と喜びの感情を伴う工夫の余地がある行為・活動である。
非生産的活動	遊びの目的は行為そのものの中にある。
規則のある活動	自発的に受け容れた規則にしたがっている。その規則はいったん受け容れられた以上は絶対的拘束力をもっている。
虚構の活動	「日常生活」とは「別なもの」という意識に裏づけられている。

この表1が示しているように、カイヨワもホイジンガもともに、「遊び」は、遊びの外にある「目的」を達成するための手段や道具ではないと考える。「遊び」の目的は

「遊び」そのもののなかにある。多種多様に絶え間なく変容する「遊び」は、このような統一性をもっている。「遊び」の規定は、ほぼこれで尽きている。教育との関連に留意して、もう少し「遊び」の規定に立ち入ってみよう。

3. 「遊び」と「教育」

文部科学省は、幼稚園教育要領（平成30年度改定）⁶において、人間形成の基礎を培う幼児教育について、5領域のねらい及び内容に基づく活動全体を通して、幼児の資質・能力をはぐくむものとしている。その指導に際して考慮すべき「三つの柱」は、「知識・技術の基礎」、「思考力・判断力・表現力などの基礎」、「学びに向かう力・人間性」である。このようにして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、次の10項目に定式化される。

- (1) 健康な心と体
- (2) 自立心
- (3) 協同性
- (4) 道徳性・規範意識の芽生え
- (5) 社会生活との関わり
- (6) 思考力の芽生え
- (7) 自然との関わり・生命尊重
- (8) 図形、文字等への関心・感覚
- (9) 言葉による伝え合い
- (10) 豊かな感性と表現

子どもは、この「育ち」の多くを「遊び」を通して達成する。勅史千鶴(1999)⁷は、子どもの「遊び」を、「教育」や「発達」と関連づけて論じている。「遊び」は、「子どもが年齢に応じて楽しむことができ、そのうえ面白さを追い求めることができる活動」である。子どもたちは、遊びを通して、手や足を、そして全身を使う。結果として、子どもたちの感覚的諸能力、大小の筋肉群の筋力とこれらを統制する能力、心臓、肺などの内蔵諸器官の機能、寒暑や雑菌に対する抵抗力などが発達する。子どもたちは、遊びを通して、人、物、自然、社会についての知識を獲得し、それらの関連について認識する力、それらを総合して使う力などを発達させる。さらに、抽象したり、想像したりする力、伝達したり、考えたり、行動を統制したりする言語の力などを発達させる。年齢を重ね、遊びの面白さがわかると、仲間を求めるようになる。発達とともに遊びが変わり、この遊びの質の変化が発達を促す。遊びと発達とは、相乗的に作用しあうのである。

年齢に応じた興味の度合いや関心の方向性の変化に応じて、多様な遊びが展開される。もちろん、たった一つの遊びであっても、繰り返されると面白さが深まり、一つのことを追求する楽しさがわかるようになる。遊びは

複雑な営みである。遊びを子どもの成長・発達にとってなくてはならない活動と認め実践していくことこそが、保育者の喜びでもあれば責任でもある。

多くの教育者が、子どもの遊びの意義を説いている。子どもにとって「遊び」は、言わば「成長をもたらすための栄養」である。子どもは、楽しいと感じる時にこそ多くを学ぶ。楽しい遊びを通して、たくさんの「考える」経験を積み、新しい発見を体感する。遊びは、「知識の栄養」「心の栄養」なのである。子どもにとっては、はっきりと「遊び」とわかる「遊び」だけが「遊び」であるわけではなく、むしろその生活のすべてが「遊び」であり、楽しい「学び」である。幼児教育は、人間形成の基礎を培う営みであるが、その大きな部分は、「遊び」を通しての「学び」である。「遊び」の質が、「学び」の深さを規定する。ところで、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議」(第9回)の記録には、次の文言がある。

「適切に遊びこむ環境」の「遊びこむ」という表現についてだが、遊びに夢中になるとかそういう意味だと思いが、遊びこむという状況はいったいどういう状況なのかをていねいに説明した方がよいのではないか。」

「遊びこむ」という言葉は、現場で慣用語として用いられ、官庁の公用語としても援用されている。しかもその際この言葉に、はっきりとした共通理解は存在しないのである。

ちなみに、「遊びこむ」という言葉は、『広辞苑』には採録されていない。『大辞林』『現代用語の基礎知識』等にも掲載されていない。「遊びこむ」という言葉を、「遊び」と「込む」に分解すると、まず「遊び」は、広辞苑では次のように規定されている。つまり、①あそぶこと、なぐさみ、遊戯、②猟や音楽のなぐさみ、③遊興、④遊びめ、⑤仕事や勉強の合間、⑥(文学・芸術の理念として)人生から遊離した美の世界を求めること、⑦気持ちのゆとり、余裕、⑧機械の部分と部分が密着せず、その間にある程度の動きうる余裕のあること、などである。

次いで、「込む」は、「混む・込む」と記され、内部へ内部へと物事が入り組んで密度が高まる意である。さらに言えば、①物が多く入り合う、混雑する、輻輳する、②細密にわたる、複雑に入り組んでいる、ややこしい、③「のみ込む」の略、承知する、④《込》他の動詞の連用形に付いて使われている。

④の「込む」には、次の四つの意味がある。つまり、第一に、何かの中に入る、または、入れる意を表す。「飛び込む」「金を振り込む」。第二に、すっかりそうなる意を表す。「老い込む」「信じ込む」「ふさぎ込む」。第三に、みっちり、または十分にそうする意を表す。「教え込む」

「鍛え込む」「煮込む」。

「遊び込む」は、以上のような「遊び」と「込む」の合成語である。たんに「遊ぶ」のではなく、遊びに夢中になる、みっちり遊ぶ、遊びの中に入り込む、つまり、遊びに没頭することである。このように「遊び込む」は、没我、我を忘れて遊びに夢中になることである。その経験が、興味関心、探究心、自己表出、他者理解、協同、共感というさまざまな経験を積み重ねさせる。このように遊びの中で、「無我夢中」「没頭する」「没我」を経験することが、幼児期には必要なのである。「遊びこむ時間」「遊びこむ遊び」「遊びこむという経験」は、子どもたちの深い学びにつながる。このような保育者たちの思念が、幼児教育のなかで「遊びこむ」という慣用語を生み出し、育んでいるものとする。次にこのことについて考えてみよう。

4. 業界用語としての「遊びこむ」

幼児教育の「世界」を「幼児教育業界」と呼ぶとすれば、「遊びこむ」や「言葉がけ」などの「慣用語」は、「業界用語」であり、保育者間では通じ合える「専門用語」である。「業界用語」は、特定の狭い世界だけで通用する言葉であり、「隠語」であり、「符牒」であり、「ジャーゴン」である。業界用語の使用は、それが通用する「うち」と通用しない「そと」とを区別する。そして、用語の通じ合わない「よそもの」を「そと」へ排除し、「うち」には「なかま」を囲い込む。業界用語は、「よそもの」を除いて「なかま」を生み出し、つながりを強めるのである。しかし、「遊びこむ」や「言葉がけ」などの幼児教育業界の慣用語は、「よそもの」を締め出し、「なかま」を囲い込むばかりではなく、保育者間で通じ合う言葉として、保育の専門性や保育の質を探ることができる言葉である。幼児教育にとって大切な専門的な理解（子ども理解、遊び理解、言語理解など）を共有して連携し合う専門家の「なかま」を生み出し、それによって幼児教育を支えるという、積極的な意義があるのである。

幼児「教育」の世界での「遊び」は、ひたすら楽しさや充足だけを追求する活動ではない。幼児教育における「遊び」は、一連の教育・学習活動のうちにあり、＜何かを学び、何かができるようになる＞という「目的」を達成するための「道具」ないし「手段」である。「遊び」は、一定の教育や学習の「目的」— それも「遊び」の「うち」にではなく、「遊び」の「そと」や「うえ」にある「目的」— を達成するために、「道具」や「手段」として利用されるのである。道具や手段として利用される「遊び」は、そんなふうには「遊ぶ」ことを勧められる本人にとっては、面白くもおかしくもなくなってしまう。指示され、指導されて、主体的にあそぶというより、遊ばされてしまうことになってしまう。そればかりではない。道具や

手段として利用される「遊び」は、「遊び」を「自由で」「自己目的的な活動」と定義するホイジンガやカイヨワからすれば、そもそも「遊び」ですらないのである。

幼児「教育」の世界は、これまでずっと、ホイジンガやカイヨワの定義からいうと＜「遊び」ではないもの＞を「遊び」と呼ぶという矛盾を抱えてきた。この業界にはたとえば、「自由遊び」という慣用語がある。この言葉には、この業界で用いられる「遊び」という言葉のもつ矛盾や葛藤が、くっきりと示されている。「自由遊び」があるとすれば、「自由でない遊び」もあることになる。しかし、ホイジンガやカイヨワの定義からすれば、「自由」でない「遊び」— 「遊び」の領域の「そと」や「うえ」で設定された「目的」を達成する手段や道具として利用される「遊び」— は、「遊び」ではない。つまり、「自由遊び」以外の「遊び」は、そもそも「遊び」ではないのである。「自由遊び」という言葉の「自由」という修飾は、「遊び」の本来の意義からして、無意味であり、不必要である。しかし、幼児教育関係者たちは、「自由遊び」という言葉を日常的に用いる。おそらくここには、幼児教育関係者たちの、葛藤する思いがある。

幼児教育関係者たちにとっては、「遊び」は、一方で、もっとも大切な教育の「場」であり「手段」である。しかし、他方で、教育の「場」や「手段」として利用されれば、「遊び」は本来の「遊び」ではなくなる。このことも、よくわかっている。幼児教育関係者たちは、幼児たちを遊びによって教育するが、その— 遊びとも言えない— 遊びで、なんとか幼児たちを楽しませ満足させたい。遊びの中に、子どもの思いや意欲といったものが子ども自身から湧き出てくることを願っているのである。この葛藤する思いが、「自由遊び」という奇妙な言葉を生み出し、「遊びこむ」という慣用語を通用させていると考えることができる。

「遊びこむ」という慣用語には、幼児教育関係者たちの矛盾し葛藤する思いが込められている。「遊びこむ」という慣用語は、本来なら「遊び」とは言えない＜学びの場や手段である「非自由な遊び」＞において、幼児たちが、本来の「遊び」におけるようにできるだけ楽しみ満足してほしいという「願い」が込められているのである。この願いが、「無我夢中で遊ぶ」幼児をイメージさせる「遊びこむ」という奇妙な用語を生み出し、仲間うちで共有させる。さらに、ひとたびできあがったこの言葉は、この言葉に出会う新人たちに、この言葉に込められた幼児教育関係者たちの願いを伝達する。そして、おずおずとこの言葉を用いる新人たちは、この思いを共有する「なかま」として迎え入れられるのである。こうして、幼児たちの自発的活動、楽しさ、充足などを大切にして教育に従事する専門的な集団が、くりかえし再生産されていくのである。

「遊びこむ」という慣用語は、閉鎖的な仲間集団を作り出すというよりも、むしろ密な専門家集団を生み出している。「遊びこむ」という慣用語の生成と専門家集団の生成との間には、生産的な循環がある。同じ専門家集団生成のメカニズムは、いま一つの慣用語である「言葉がけ」においても認められる。次にはこれについて考えてみよう。まず、子どもの言葉の習得について考えることから始めよう。

5. 子どもの言葉の習得

トマセロ(2006)⁸は、『心とことばの起源を探る—文化と認知—』において、「ことばは思考の道具であり、コミュニケーションの道具である」と述べたうえで、その「習得」について次のように記している。

「子どもは一つの自然言語を習得することによって文化的に重要な情報に触れるようになるだけではない。一つの自然言語を習得することは、子どもが自分の世界の様々な面に注目し、それらの面を概念化する特定の方法を社会化するすなわち文化的に構造化するという役割も果たすのである。自分に向けられた言語的なコミュニケーション行為を理解しようとする過程で、子どもはカテゴリー化と概念的な視点選択という、ある非常に特殊なプロセスに参加することになる。」

子どもたちは、日常的生活世界での自分へのさまざまな非言語的・言語的呼びかけに——母親など身近なモデルの言語行動を模倣する仕方、試行錯誤的に——リアクトし、さらに自分を取り巻く世界(環境・文化など)からもたらされる大量の雑多な情報を見様見真似に言語化して自分自身のヴォキャブラリーを増やして、徐々に自然言語(母語)を身につけていく。この言語化しカテゴリー化する力によって、子どもは、理解力や創造力や推理力や構想力を伸ばし、文化や社会の仕組みを自分なりに受け入れそれへと適応していく。つまり子どもは、自然言語(母語)の獲得によって、自分自身をつくりあげ、自分の世界をつくり出していくのである。こうして子どもたちは、コミュニケーションの主体となり、コミュニケーションを通じて相手の世界の豊かさを知るとともに、自分を自分の言葉で相手に伝えることができるようになる。

保育内容「言葉」の教育もまた、子どもたちの自然言語の習得のメカニズムを尊重しそれに倣うほかはない。つまり、子どもたちに言語を教え込むのではなく、日常的なコミュニケーションや遊びなどを通して言葉の習得を促していくのである。保育者は、たとえば遊んでいる子どもたちに、思いや願いを込めた言葉を投げかけていく。子どもたちを受け止め、認め、揺さぶり、子どもた

ちが保育者の思いや願いをうまくつかめるように「言葉がけ」をする。保育者たちの「言葉がけ」は、子どもたちの認知に働きかけるばかりではなく、子どもたちの全存在に働きかけて、子どもたちの成長を促すのである。この「言葉がけ」という言葉の意味を、どのように解すべきか。次にはこのことを考えてみる。まずは、辞書を見ることから始めよう。

6. 保育者の援助としての「言葉がけ」

たとえば広辞苑には、「言葉」という語に別の語が付加された複合語が幾つか載っている。「言葉遊び」、「言葉返し」、「言葉違い」などである。しかし「言葉がけ」という語は、「遊びこむ」と同様、広辞苑に限らずどの辞書にもみられない。ただ「言葉を掛ける」は載っており、「相手に対して物を言いかける」と説明されている。この「言葉を掛ける」が「言葉がけ」という特有の言い回しで、とくに幼児教育の世界で用いられているものと考えられる。このことを裏付けるデータがある。

論文検索システムで「言葉がけ」というワードで検索をかけると、114の論文がヒットする(2017.11)⁹。これを教育系、心理・看護系、運動系に分類してみると、教育系が65%、心理・看護系21%、運動系14%という結果となった(図1)。

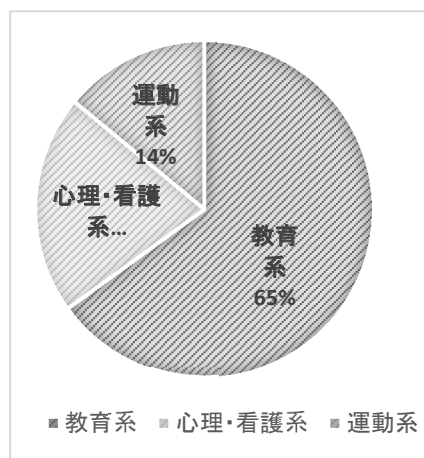


図1 言葉掛けというワードで検索された論文の種類

運動系16論文のうちでは、小学生や大学生の指導者向けに書かれた論文が15、選手への指導を扱う論文が1である。これらを教育系に含めるなら、全体の80%近くになる。この教育系論文の扱う教育対象者を、幼児・小学生・中学生・高校生・大学生・社会人に分けると、図2のようになる。

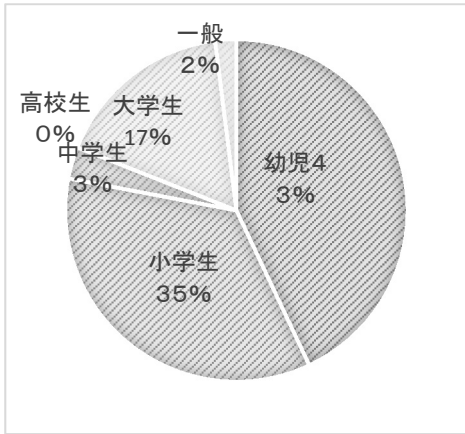


図2 教育系の論文の対象者

主には言葉の習得過程にある幼児や小学校低学年が扱われているのである。子細に見ると、中学生・高校生に関してはスポーツや運動が、大学生については教員養成課程における幼児教育が、扱われている。「言葉がけ」という慣用語は、主に年少の子どもたちの教育に関連して用いられる言葉であることがわかる。

小学生を扱う論文を音楽・運動・特別支援・その他に分類すると、図3のようになる。言語指導、言語活動ではなく、興味や意欲を大切に教育領域に偏っている。子どもたちのからだ全体や聞く力に注意を向けて、適切な言葉をかけて、励まし、楽しませて、自発性や意欲を育てる。このような領域に「言葉がけ」がかかっているのである。



図3 小学生を対象にした論文の領域

大学生を対象とする論文においては、大学の幼児教育課程を扱う論文が18%、大学生の幼児教育へのかかわりを扱う論文が64%であり、後者では、幼少連携や幼児の遊びや保育内容などが論じられている。大学生を対象とする論文の大半が、小学校の低学年を含めて年少の子どもたちの教育に関連している(図4)。ここでも、「言葉がけ」という言葉は、幼児教育においてこそ日常的につかわれていることばであることが分かる。

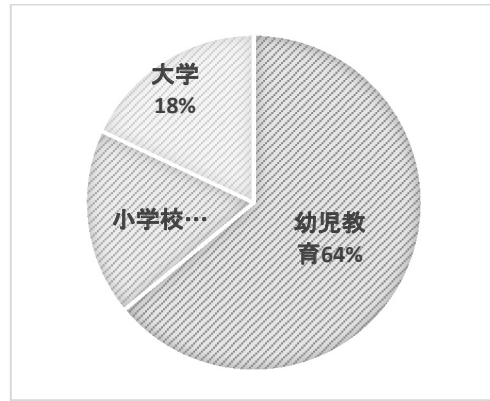


図4 大学生を対象にした論文の領域

以上の関連論文の分類によって、「言葉がけ」という言葉が、教育系の言葉であるということ、教育系でも幼児教育や小学校の低学年、保育士、幼稚園教諭、教員養成課程に関連して用いられていることがわかる。このように主に幼児教育の世界で用いられる「言葉がけ」という慣用語は、どのように理解されるべきか。

8. 今一つの慣用語—「言葉がけ」

「言葉がけ」という特異な言葉は、身体レベルの認知(あたまではなく、からだでわかること)が優位を占める幼児への教育的働きかけを日常的に繰り返す関係者たちによってこそ、生み出され、共有されると考えることができる。

「言葉がけ」という語がイメージさせるのは、「ことば」をくもの>のようにただ渡すという動作ではない。この語がイメージさせるのは、外界から裸身を守る毛布のように「ことば」で幼児をくるみ支えようとする保育者たちの構えである。幼児にとっての「ことば」は、まだ「からだ」から切り離されてはいない。「あたま」だけに働きかける「ことば」は、幼児の「あたま」と「からだ」を切り離してしまう。「ことばがけ」においては、ことばは、切り離す用具ではない。ことばは、保護膜や被包膜となり幼児の全存在を支え、さらに幼児を活動へ差し向けるべくやさしくその背中を押すのである。

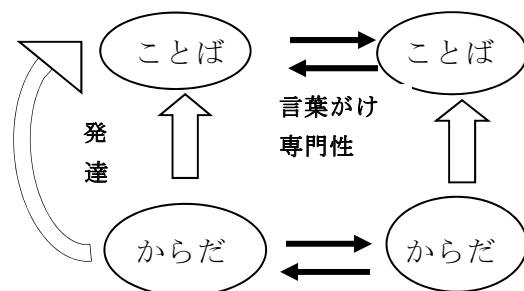


図5

このように複雑で高度な教育と学習の文脈を作り出す「言葉がけ」という慣用語を実践的に使用することによって、幼児教育の関係者は、単純な教授・学習過程を超えた、複雑で高度な文脈を作り出す専門家となる(図5)。

言葉は、からだを通して体験する中で習得されていく。からだを動かすこと、遊ぶこと、関わりあうことで言葉が生まれ、言葉を使って思いを伝えあうことで、言葉の使い方や相手の思いやその場の雰囲気をも感じ取っていく。保育者が子どもの発達過程を理解し、専門性を発揮して関わる、言葉がけをしていく必要がある。

このような慣用語を受け入れその使用になじむことによって、新来の幼児教育関係者もまた徐々に専門家となる。すでに述べたように、「言葉がけ」という特異な業界用語は、身体レベルの認知(頭ではなく、からだでわかること)が優位を占める幼児への教育的働きかけを日常的に繰り返す関係者たちによってこそ、生み出され、共有される。「言葉がけ」という慣用語もまた、これを受け容れる「専門家集団」をくりかえし生み出し、再生産するのである。

考察と今後の展望

以上述べてきたように、「遊びこむ」や「言葉がけ」などの幼児教育の慣用語は、うちとそと、親密と疎遠とを切り分ける。この切り分けは、慣用語の通用する「うち」に、凝縮された仲間意識、連帯感、親密性を共有し、相互に教育責任を分有する専門家集団を生み出すのである。しかし、これらの幼児教育における慣用語は、一般的な業界用語のように閉鎖的であるべきではない。

「遊びこむ」や「言葉がけ」などの幼児教育業界の業界用語を“professional jargon”, すなわち専門用語と捉えると、これまで見てきたように、これらはすべて、幼児教育の専門性を示す言葉であり、幼児とその成長を尊重しようとする幼児教育の独自性やユニークさ、幼児教育の深さにつながっている。これらは、“jorgons used by nursery staff”として、幼児教育という特殊な世界で生きてはたらいっているのである。

しかし「遊びこむ」「言葉がけ」という専門用語は、幼児教育の世界にとどまらず、幼児教育の外の世界にも十分に有用であると考えられる。これらの慣用語は、幼児教育の「そと」の世界に対して、<幼児とその成長を尊重する>ということの意味をくまらごとに>伝達する力をもっていると、考えることができるからである。

今後の研究では、「遊びこむ」や「言葉がけ」という慣用語が、現場でどのように生まれ活かされているのかについて調査分析を行う。そして、本研究での理論的検討と今後の調査研究を合わせて、「遊びこむ」「言葉がけ」などの慣用語が示す幼児教育の特殊性、ユニークさをとらえ、その幼児教育の業界を超えても普遍的な意義に

ついても検討していきたい。

—注—

- (1) 秋田喜代美「遊びこむ力」全国国公立幼稚園長会『幼稚園じほう』5月号, 2006, pp.4-8.
- (2) 五味文彦『梁塵秘抄のうたと絵』文春新書 2002, pp.74-76.
- (3) 森洋子『ブリューゲルの「子どもの遊戯」—遊びの図像学』未来社, 1989
- (4) ヨハン・ホイジンガ『ホモ・ルーデンス』高橋 英夫 訳 中公文庫, 1973.
- (5) ロジェ・カイヨワ『遊びと人間』多田 道太郎・塚崎 幹夫 訳 講談社文庫, 1990
- (6) 文部科学省「幼稚園教育要領」平成 29 年 3 月 31 日文部科学省告示第 62 号 建帛社, 2017
- (7) 勅史千鶴『子どもの発達と遊びの指導』ひとなる書房, 1999, pp. - .
- (8) マイケル・トマセロ『心とことばの起源を探る』(大堀 壽夫・中澤恒子訳) 勁草書房, 2006, pp. 75-79.
- (9) 論文検索: 2017.9.11 検索
<http://ci.nii.ac.jp/search?q=%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%80%80%E8%A8%80%E>

【参考文献】

- (1) ジャック・アンリオ『遊び: 遊ぶ主体の現象学』(翻訳/佐藤信夫) 白水社 2000
- (2) 無藤 隆・汐見 稔幸・砂上 史子『3 法令ガイドブック』フレーベル館 2017